柏木・角筈一目屏風

展示している「柏木・角筈一目屏風」は、現在の中野区側から西新宿・新宿方面を描いています。明治初年の光景を思い出しながら描いたこの屏風の絵は、江戸に近接したこの地域の特徴を表しています。

絵の構図は手前に神田上水があり、左手前に淀橋、右手前には熊野十二社（じゅうにそう）が描かれています。淀橋から屏風中央部にかけて青梅街道が、熊野十二社の右側から屏風中央部にかけて甲州道中が描かれています。青梅街道沿いの町屋裏には梅の花が咲いている畑が描かれていますので、季節は早春でしょう。では、この屏風に描かれた特徴的な光景をみていきましょう。

1 淀橋と水車

左下に描かれている橋が淀橋です。神田上水に架けられたこの橋は、現在でも青梅街道沿いにあり、新宿区と中野区の区境となっています。橋の上には親子連れが描かれ、橋を渡った先の新宿区側には鞍の脇に荷を付けた馬と、それを曳く人が描かれています。江戸を整備するため青梅から石灰を運ぶ目的で造られたとされる青梅街道ですが、次第に多摩方面の村々から江戸へ運ぶ農産物や、江戸から村々へ肥料や日用品を運ぶ経路となっていきました。

街道沿いに右手に進むと、すぐ門付きの家が描かれています。しかし手前の門と一軒おいた長屋門（ながやもん）を比べると、手前の門は閉められ、入り口前には結界が設けられており、通常は使用していない様子がうかがえます。この家は江戸時代には「水車久兵衛」と呼ばれた家です。結界がある門は「御成門（おなりもん）」といい、将軍が来訪した際だけ出入りした門です。享保 17 年（1732）に、8 代将軍徳川吉宗が鷹狩の際にここに立ち寄って休息したのにはじまり、１１代将軍家斉までここを訪れました。

門の左手、木々に囲まれている中に水車が付いた家屋が描かれています。これが淀橋の水車です。寛文年間（1661 ～ 73）に、玉川上水から神田上水に助水堀が造られた時、水車久兵衛の先祖が水車の設置を認められたもので、通常は持ち込まれた米や麦を衝いていました。

この水車が脚光を浴びたのは、幕末の嘉永 7 年（1854)6 月 11 日に起こった爆発事件です。ペリー来航以来、欧米の脅威に対抗するため幕府は海防に力を入れ、その一環で火薬づくりを進めました。しかし新たに大量の火薬を作る場所がなかったため、通常は米や麦をついていた水車に火薬製造が命じられました。十分な設備も整わなかったため、爆発事故を起こしてしまったのです。幸い死者は出ませんでしたが、隣家は焼失し、多数のけが人が出たことも記されています。

2 青梅街道沿いの街並

① 米穀問屋　大和屋

屏風の左から 2 曲目右端に火の見梯子が描かれていますが、その右側に黒い暖簾を付けた商店があります。店内には酒樽らしいものもありますが、この店は大和屋という米穀問屋だったことが判明しています。

淀橋には米穀問屋が数軒集まり、武蔵野の村々から米穀を集めて江戸へ送る陸附（おかづけ）米穀問屋として営業していました。陸附米穀問屋は板橋、千住等の街道沿いの米穀の集積地に設けられました。淀橋は内藤新宿に隣接し、青梅街道沿いにあるという地理的条件と、製粉化する水車があるという条件を併せ持っていたことが、米穀問屋が集まった理由と考えられます。江戸時代中頃の安永 2 年（1773）には、大和屋を始め 5 軒の淀橋

の米穀問屋が仲間を作り、文政 6 年（1823）には 12 名に増えていました。しかし、江戸で米穀問屋を営業していた江戸地廻（じまわり）米穀問屋仲間から、自分たちの仲間に入らないで江戸近郊で同様の商売をしているとの抗議が出され、淀橋の米穀問屋仲間の者たちは、江戸地廻米穀問屋仲間の一番組に加入することになりました。屏風には大和屋の他にも数軒の米穀問屋が描かれています。店先に積まれている米俵が目印となります。

②草分湯

大和屋の数軒先に、魚と記した暖簾をかけた店がありますが、その手前に通りから少し引っ込んでいる店があります。よく見ると店の入り口が 2 つあり、それぞれに暖簾がかけられています。この店は「草分湯」という風呂屋です。この風呂屋の家伝によれば、徳川将軍がこの地に鷹狩に来た際、泉屋と称したこの家の井戸の水質が良質であったため、将軍用の茶の湯や湯あみの水に提供したことがあり、それが「草分湯」として風呂屋を経営するもととなったとされます。

屏風の左半分の中心となっているのは青梅街道沿いの町並みです。ここに取り上げた米屋や風呂屋以外にも、薬屋、魚屋、馬宿など、暖簾、軒先、店内の様子を見ると、それぞれ詳細に描かれていることがわかります。

3 熊野十二社と神田上水助水堀

① 熊野十二社

屏風の右端を見ると、木々に囲まれた池と、その岸辺に壁がない、屋根と柱と床でできた建物が描かれています。池の左手に鳥居があるので、ここが神社であることがわかります。角筈村の鎮守である熊野十二社です。室町時代に、熊野（現･和歌山県）から出てきた鈴木九郎が故郷の熊野十二社を勧請したのが起源とされています。江戸時代の熊野十二社は物見遊山の名所として知られ、池には掛茶屋が建てられ、舟遊びに興ずる人もいました。その光景は「江戸名所図会」にも紹介され、江戸近郊の景勝地として親しまれました。池は大小ふたつあり、共に角筈村の用水となっていました。また、この池は江戸時代には将軍に上納する多摩川で捕れた鮎の生け簀が設置されました。昭和 43 年（1968)7 月に池は埋め立てられましたが、現在でも周囲と比べると一段低くなっており、池があったことが推測できます。

② 神田上水助水堀（じょすいぼり）

熊野十二社から淀橋に向かって田の中を低木の並木が並んでいる土手が描かれています。左から 3 曲目には堰とそこから水が落ちている様子が描かれていることから、そこは水路であることがわかります。この水路が寛文 7 年（1667)、神田上水の水量を補うため玉川上水から水を引いた神田上水助水堀です。甲州道中沿いにある代々木村正春寺の西側にあった玉川上水から水を引き、熊野十二社の東側を南から北へ流れ、淀橋の手前で神田川に流れ込んでいます。この水路は開削当初水が流れず、水路に土地を供給した農民たちが、土地の返還を要求する事態が発生したことも判明しています。現在でも水路の一部は区立けやき児童遊園となり、その面影を伝えています。